論 文 の 内 容 の 要 旨

論文題目　　近代日蓮主義の社会思想的展開
――その批判的考察

氏　名　　松 岡 幹 夫

本論文は、鎌倉仏教の祖師の一人・日蓮から影響を受けた近代の日蓮主義者たちが独創的な仏教的社会思想を展開したことを指して「近代日蓮主義の社会思想的展開」と称し、その様相を主として日本思想史研究の立場から考察するものである。従来、この分野における研究は日蓮系ナショナリズムに集中する嫌いがあり、近代の日蓮系社会思想を総合的に考察したものがまだみられない。また日蓮系社会思想に対する分析の視点が単眼的であったり、日蓮の国家観や政治的志向の多面性を考慮してこなかった、という問題もある。本論文ではこれらを踏まえ、まず日蓮の多面的な国家観や政治的志向を把握するようにし、しかる後に近代の日蓮主義者たちが日蓮の教義をいかなる時代的影響や思想傾向の下で受容し近代的社会思想として展開したのか、を各論的に検討した。すなわち序章では、宗教哲学・日本仏教史の立場から日蓮の多面的な国家観や政治的志向の全体像を鳥瞰し、それらの類型化を試みた。続いて第一章から第六章では、近代日本思想史研究の立場から代表的な日蓮主義者たちの社会思想形成史を明らかにした。そして終章において、序章で定立された日蓮の国家観や政治的志向に関する諸類型によって個々の日蓮主義者の社会思想を分類し、日蓮仏教の多面性が時代性や個人性の影響を受けつつ多様な社会思想として展開されていった様相を、ありのままに描き出すように努めてみた。

日蓮の民衆中心主義的な国家観は、天皇制イデオロギーに支配された近代日本では民主的国家観として明確に意義づけられることがなかった。けれども民衆を救国の主体者として擁立しようとする日蓮の〈民衆主体化〉の思想が、何らかの形で近代の日蓮主義者たちに影響を与えたとみることは可能である。また日蓮にみられた三種の国家観――〈普遍的真理が支配する国家〉観、〈超越者が支配する国家〉観、〈超越的自己が支配する国家〉観――が近代日本においていかに受容され展開されたのか、ということに関して、本論文ではナショナリズム、戦争論、共生主義という三つの視角から論じた。第一にナショナリズムの視角においては、日蓮主義者たちの中から田中智学と北一輝を選んで考察した。日蓮が有する三種の国家観は、智学や北の個人的な思想傾向――国体信仰、尊王愛国の

心情、霊感主義――と、明治以降のナショナリズムの時代性とを通じて、本来の仏国土思想・仏教的コスモポリタニズム・自己即宇宙という立場を逸脱し、日本中心主義やウルトラ・ナショナリズムに結びついていったことが確認される。第二に戦争論の視角においては、とくに石原莞爾と妹尾義郎を取り上げた。石原と妹尾における日蓮主義の戦争論的展開は、いずれも後期日蓮の〈超越者が支配する国家〉観に基づいていたことが特徴的である。にもかかわらず、その傾向は、聖戦論（石原・太平洋戦争時の妹尾）・正戦論（日蓮主義者時代の妹尾）・反戦論（新興仏青期の妹尾）の三方向に分れた。その原因は、人道主義、マルクス主義、国体信仰といった彼らの個人的思想傾向に求められる。なお本論文では、田中智学、北一輝、牧口常三郎の戦争観に関しても折に触れて論じたが、結局のところ、日蓮の思想を本来的な形で展開した戦争論は近代日本ではみることができなかった。第三に共生主義の視角においては、宮沢賢治と牧口常三郎、妹尾義郎の三人の思想を考察の対象とした。近代日蓮主義の共生思想的な展開は、やはり個人的思惟傾向（賢治・妹尾）や日蓮の国家観に関する断片的理解（牧口）によって、その変質を免れなかったと言うべきである。

さて次に、日蓮の政治的志向が近代日本でいかに解釈され展開されたのかをみてみると、まず初期日蓮の「立正安国論」にみられる〈国家とともに国家を超える態度〉を近代日本において実践した人物としては、田中智学や牧口常三郎の名を挙げることができる。けれども智学における国家超越は、彼の堅固な国体信仰によって日本や日本民族の宗教的聖性を高揚する方向へと流れ、ここに初期日蓮の政治的志向が日本中心主義的に変質したことを指摘し得る。他方、智学のごとき国体信仰を持たず、日蓮の説く仏法が国家超越的な宇宙の真理であるとともに自他共生の生活法則でもあると捉えた牧口の政治的志向は、まさに初期日蓮の〈国家とともに国家を超える態度〉に通じている。しかしながら牧口には、後期日蓮の政治的志向の継承がみられない。後期日蓮の政治的志向は〈超越的立場から国家に向かう態度〉と表現できるが、この日蓮の政治的志向に感化された日蓮主義者に北一輝、石原莞爾、妹尾義郎がいる。ただし北や石原の場合は尊王心、国体信仰、霊感主義などによって後期日蓮の超越的立場がファナティックな日本中心主義と結びつけられた。また妹尾の場合にはマルクス主義の革命思想やインターナショナリズムの影響が加わったために、時に天皇制否定を口にするなど、日蓮にはみられなかった体制否定の思想も現れている。さらにまた、後期日蓮における今一つの政治的志向――〈国家を包み越える態度〉――について言えば、この日蓮の政治的志向を継承した田中智学や北一輝が、救国の主体者たる責任感を発揚している。日蓮教学において凡夫本仏論に肯定的な立場をとる智学は自己即宇宙観に立ち、この超越的自己の信仰のうえから国家諫暁を唱えている。また北は「日蓮は日本国」との日蓮の確信に学び、「唯我一人能為救護の大責任感」のうえから日本の革命を志している。智学や北の政治的志向には、後期日蓮の〈国家を包み超える態度〉がたしかに脈打っていたと言える。しかし他面、彼らはここでも日蓮の政治的志向をナショナリズム的に変質している。すなわち智学の国体論的日蓮主義は、後期日蓮にみられる救国主体者としての絶対的責任感を日本による世界統一の願望と結びつけ、ウルトラ・ナショナリズムを生み出している。北の救国主体者意識も、中国大陸で「五・四運動」の排日の嵐に遭遇した際、ナショナリズム的義憤の念を抱いたことが発端となっている。それゆえ北は、後期日蓮の〈国家を包み越える態度〉を革命的情熱の起爆剤としながらも、「大日本帝国の世界的使命」を唱えるウルトラ・ナショナリズム的態度に終始した。〈国家を包み越える〉という後期日蓮の政治的志向は、近代日本においては否応なくナショナリズムの枠内に押し込まれた感がある。

以上の考察から、近代日蓮主義の社会思想的展開は、一つには国体信仰、尊王愛国心、真宗的精神性、霊感主義などの個人の思想傾向、二つには近代日本に広がったナショナリズム、帝国主義、マルクス主義などからの時代的影響、そして三つには日蓮の思想それ自体の多面性のゆえに、じつに多種多様に行われたことが理解される。したがって近代の様々な日蓮系社会思想の成立は、従来の見解のごとくその原因を時代性にのみ求めることはできない

し、同様に、個人性や日蓮の思想性のいずれか一つに帰するわけにもいかない。各々の日蓮系社会思想は、あくまで時代性・個人性・日蓮の思想性という三つのファクターの相互作用を通じて形成されていったのである。また近代の日蓮系社会思想が多様に生起した要因としても、上述の三つのファクターをすべて挙げねばならない。ただし、個人の思想傾向や時代思潮の多様性は、ベースとしての日蓮思想が多面的であるからこそ多様性のまま日蓮系社会思想の中に反映されていったのであり、この点からは、日蓮思想の多面性こそが主要因として考慮されるべきであろう。また本論文での考察の結果、浮び上がった重要な見解が今一つある。それは、近代の日蓮主義者たちは、日蓮思想の社会思想的展開を本来的な形で行うことができなかった、ということである。本来的に、と言うのは、日蓮の多面的な国家観や政治的志向が最終的に到達した地平を見定め、しかもその最終的地平との思想的同質性を保ちながら、という意味である。いかなる思想を継承し発展させる場合にも、それが人間の歴史的営為であるかぎり、時代性や個人性の影響がそこに混入することは免れない。しかしながら、そうした影響が原思想の核心を的確に捉えたうえでそれを同質的に変化させようとするものならば、それは特定の時代性と個人性を生かした原思想の展開であると言い得るのではなかろうか。すなわち日蓮の国家観や政治的志向が最後に極まった段階――〈超越的自己が支配する国家〉観と〈国家を包み越える態度〉――を捉え、その思想核を損なわぬように社会思想的展開をはかることが本来的なあり方である、とも考えられるのである。